

6) 新しい腫瘍マーカー尿中 6-Hydroxymethylpterin (6-HMP) に関する研究
—口腔領域悪性腫瘍における臨床的有用性について—

戸谷 収二・小野 徹 (日本歯科大学
新潟歯学部
歯学研究科)
小西 雅志・高田 正典 (同
第一口腔外科)
渡辺 陽 (同
第二口腔外科)
広安 一彦 (同 内科)
蒲澤 崇・又賀 泉 (同 内科)
柴崎 浩一 (同 内科)

1981年 Rao らにより報告された葉酸関連物質である尿中 6-HMP が腫瘍マーカーとして有用であるか否かについて、口腔領域の悪性腫瘍患者を対象として基礎的・臨床的検討を行った。対象は口腔領域の悪性腫瘍患者41例、非悪性腫瘍患者95例であり健常者76例を対象群とした。測定は HPLC 法を用い内標準物質と 6-HMP のピーク面積比より定量した。

【結果】

- ① 尿中 6-HMP の日内変動は小さく随時尿測定が可能であった。
- ② 尿中 6-HMP の経時的変化では冷蔵庫保存で7日間、室温保存で24時間は安定であった。
- ③ 口腔領域の悪性腫瘍患者の尿中 6-HMP の感度は90.2%、特異性は75.8%、精度は80.1%であった。
- ④ 腫瘍摘出により尿中 6-HMP 量は明らかな減少を示した。

以上より尿中 6-HMP 量の測定は口腔領域の悪性腫瘍患者の診断、予後判定の指標として有用と考えられた。

7) 新しい腫瘍マーカー尿中 6-Hydroxymethylpterin (6-HMP) に関する研究
—消化器領域悪性腫瘍における臨床的有用性について—

広安 一彦 (日本歯科大学
新潟歯学部
第一口腔外科)
戸谷 収二 (同
第二口腔外科)
黒田 兼・相川 啓子
豊島 宗厚・曾我 憲二
柴崎 浩一 (同 内科)

尿中 6-HMP が消化器悪性腫瘍患者の診断ならびに経過観察、治療効果判定のための腫瘍マーカーとして有用であるか否かを検討した。対象は消化癌65例(食道癌

3例、胃癌12例、大腸癌13例、原発性肝癌20例、胆道癌13例、膵臓癌4例)と、良性疾患127例(肝疾患以外106例、肝疾患21例)である。

【結果】

- ① 消化器癌患者における陽性率(感度)は76.9%であり、胃癌・胆道癌・膵癌では高率であったが、原発性肝癌では65%とやや低かった。
- ② 尿中 6-HMP の特異性・精度はそれぞれ69.3%、71.9%と良好であった。
- ③ インターフェロン投与中の慢性肝炎で高値を示した。
- ④ 尿中 6-HMP は腫瘍の増大とともに増加し、手術、放射線照射、化学療法などの治療後に低下したことから、経過観察・治療効果判定に有用な腫瘍マーカーの一つとして臨床応用が可能と考えられた。

8) 超高齢者に対する頭頸部癌治療の検討

松沢 真・犬飼 賢也 (県立がんセン
ター新潟病院
耳鼻咽喉科)
長谷川 聡

1990年1月から1994年12月の5年間に、当科で加療を行った80歳以上の頭頸部癌患者29例(男性16例、女性13例)を対象として、その治療内容を検討した。

疾患別内訳は口腔9例、喉頭8例、甲状腺3例、上顎洞2例、下咽頭2例、その他5例であり、このうち新鮮例は23例、再発は6例であった。

根治的治療の適応がある症例は29例中21例で、他は進行癌のため根治不能と考えられた。さらに病期分類に応じた根治的治療を実際に伝えたのは21例中13例(62%)であり、その他は高齢を理由に姑息治療となった6例、および治療拒否2例であった。根治手術の内容は、舌垂全摘および再建1例、喉頭全摘1例、甲状腺全摘1例、耳下腺全摘1例、頸部郭清2例、口腔部分切除3例などであった。

これらのことより、たとえ80歳以上の高齢者であっても、かなりの症例で根治的治療が目指せるものと思われた。